

ガンバ大阪アカデミーコーチ

宮本恒靖

聞き手 布施鋼治



旧ユーゴ紛争から二〇年 子どもたちに融和のための スポーツアカデミーを

——そもそも、ボスニア・ヘルツェゴビナに関心を抱いたきっかけを教えてください。

宮本 現役引退後、なにか勉強しようと思いました。せっかく勉強するのなら、自分がやってきたサッカーとリンクするものがいいなと考えていた矢先、FIFAマスター（国際サッカー連盟が運営するスポーツ学に関する大学院コース）の存

みやもと つねやす

1977年生まれ。ワールドカップでのマラドーナのプレーを見てサッカーを志す。93年U17世界選手権出場、ガンバ大阪に所属し、日本代表としてFIFAワールドカップ日韓大会・ドイツ大会に出場。07年レッドブル・ザルツブルク（オーストリア）、09年ヴィッセル神戸に移籍。11年現役引退、13年FIFAマスター修了。

在を知り、二〇一二年に進学しました。グループで修士論文を書くことになったのですが、その中にボスニア出身の女性が出た。それがボスニアをテーマにしようとしたきっかけですね。修士論文のテーマは、「ボスニア・ヘルツェゴビナのモスタルに、民族融和と多民族共栄に寄与するような子ども向けのスポーツアカデミーを設立できるか」にしました。

——現役時代、現地の選手や関係者から民族紛争の話聞いたことはありましたか。

宮本 一九九五～九六年にガンバ大阪で一緒にプレーしたクロアチア系の選手などから耳にしたことはありました。それほど詳しくはありませんでしたが。

——モスタルは九二年から三年半の間に死者二〇万人、難民避難民二〇〇万人を出したボスニア紛争の激戦地です。テーマとして、どこまで追求できるか、難しい課題ですね。

宮本 確かに難しさはあります。FIFAマスターでの研究はフイジビリティ・スタディ（プロジェクトの実現可能性を事前に調査・検討すること）なので、最終的に自分たちでできるのではないかと結論づけましたが、その後の展開としては、外務省のモスタル市に対する「草の根文化無償資金協力」など各方面から協力の手が差し伸べられなかったら、具体的に実現することはできなかったでしょうね。

——前例になるような取り組みはあったのですか。

宮本 ないですね。FIFAマスターの卒業生の研究プロジェクトで、年に一回ぐらいの割合でイスラエルとパレスチナの子どもたちを集めてサッカークリニクをやっている例はあります。でも、自分たちはテンポラリー（一時的）ではないものを作っていきたいのです。

無心のプレーが、人びとの心の傷を癒す

——初めてボスニア・ヘルツェゴビナに足を運んだのはいつでしたか。

宮本 二〇一四年の一月です。それから四回足を運びましたが、最初の訪問が一番印象に残っています。首都サラエボには銃痕が残っているビルがあちこちにあり、モスタルでもたくさん墓地を目にしました。そういうところは、紛争が終わって二〇年経った現在も残っている。観光名所に行っても、「一九九三年を忘れるな」と記されていたり、紛争当時に町の象徴だった橋——スタリ・モスト（古い橋）が壊される瞬間の映像が流されていたりする。だからこそ、何か自分に役立てることはないかと思いました。

——現地に足を運んだことでプロジェクトを押し進めていく決意はより強くなったかと思います。

宮本 いや、むしろ簡単ではないなという気持ちの方が先に来ました。現地の人々の心に残っている傷跡は外部の人間には計り知れないものがあるんじゃないかと思いましたから。

——現地ではムスリム系とクロアチア系の住民は別々のエリアに住み、学校の授業も民族ごとに行われていると聞きます。そうした中、宮本さんたちが聞いたサッカークリニク



クを始める段階になれば、特段大きな問題は感じませんでした。もちろんそこに子どもたちを連れて行くにあたって、親御さんたちには「なんでほかの民族の子どもたちがいるところに、わが子を参加させないといけないのか?」といった気持ちもあったでしょうが、子どもたちが集まってプレーする

は両民族の子どもたちを集めて行われた。

宮本 私も高校を見学しました。生徒たちはひとつ屋根の下にいるのですが、たしかに民族ごとに違うところと勉強していても、サツカークリニツ

のはサツカー。そういったわだかまりを少しワキに置いて、プレーを楽しむ、一緒にボールを追いかける光景を見る、そういう時に意味のあるプロジェクトになる可能性は十分はあると思うようになりました。紛争直後や、まだ年月が経っていない時点だったら難しかったかもしれません。

開催場所は中立地帯を選んだと聞きました。

宮本 はい。モスタルの中央を流れる川があつて、それを境にイスラム系住民とクロアチア系住民に分けられているのですが、市の中心部に位置する市役所のすぐ裏によい場所がありました。コンクリートで固められていましたが、夏場はそこでコンサートが開催されるような、古くからある市民の憩いの場みたいな感じでよかったですね。

—男子だけではなく、女子も参加しています。

宮本　そうですね。プロジェクトとして「男女平等」を掲げていたし、現地と交渉していく中で「女子もプレーできるの？」という声もあったので。コミュニティ全体の理解を得るためにも大事なことだったと思います。もともと子どもたちはタフなので、女の子であっても男子に負けないくらいのは勢いを持った子もたくさんいました。とはいえ、サッカーをやる女の子はまだ少ないみたいで、これから増えていけばいいね、という話もできました。

子どもたちの将来へ、持続可能なアカデミーを

——クリニックを開催していく中で、最終的にスポーツアカデミー開設を目指していくわけですね。

宮本 名前はマリ・モスト（小さな橋）。来年の開校を目指しています。現状は中立地帯に確保した敷地の古い建物をリノベーションしてクラブハウスを建設したり、人口芝のグラウンドを作ろうという段階ですね。日本政府からはモスタル市に対し三千万円弱の資金援助を行い、建物の建築費をそれで賄います。問題は、運営費をいかに捻出するかです。現地でも「いいプロジェクトだ」と評価してくれる人は多いのですが、いかにせん、子どもからお金を取ることはできません。スタッフやコーチの人件費も考えなければならぬので、その資金確保は課題です。

——アカデミー設立後の展望を聞かせてください。

宮本 七歳〜一二歳までの子どもをだいたい八〇名集め、週二〜三回練習します。アカデミーでは、ただサッカーをプレーするだけではなく、チームワークやフェアプレー、あるいは他人を尊重することなど、人生に大切なことを学んでほしい。そういうカリキュラムができたらと考えています。

——旧ユーゴスラビア最後の代表監督で、日本代表監督とし

ても一世を風靡したイビチャ・オシム氏からも激励の言葉をかけられたとか。

宮本 「非常に有意義なプロジェクトだからぜひ成功させてほしい」と言われました。その一方で、「お金があるところにはみんな寄ってくるから気をつけなさい」と釘を刺されました。ボスニアは汚職が多いようで、日本ほどクリーンではない。実際にこのプロジェクトで日本政府から援助された資金を動かすときは、日本側の承認がないと引き出せないような仕組みになっています。

——アカデミーの開設が、スポーツを通じた民族和解の一つの試金石として、広く認知されてほしいと思います。

宮本 戦火の爪痕が残る環境で育つ子どもたちが、将来その国を支える人材になっていく。彼らが大人になった時にお互いわかりあうという経験を持っていたほうが、国もよくなるという考えを理想としたいですね。スポーツにはそういった力があると思います。

設立して数年経てば、いろいろフィードバックがあると思います。日本でもこのプロジェクトが素晴らしいと認識されたら、資金援助を受けられる環境が整えられるかもしれません。それを活かして、次は違う場所で同種のアカデミーを作っていくという話に進むことを期待しています。●